

～みんなで政党を作ろう～

# 沖縄は日本に、戻れないかもしれなかった。

## 戦後の沖縄で起きていた、あまり知られていない話

毎年6月23日、慰霊の日が来るたびに、私たちは沖縄戦で失われた多くの命に思いを寄せます。

「地上戦」「住民を巻き込んだ戦い」「多くの犠牲者」——。  
沖縄戦が悲惨だったことは、今では広く知られています。  
しかし、その"戦後"についてはどうでしょうか。  
戦争が終わったあと、沖縄がどんな状況に置かれていたのか。

そして、今のように「日本の沖縄」になるまでに、どんな人たちが、どんな  
思いで行動していたのか。

そこまで知っている人は、実は多くありません。

今回の記事は、参政党の参議院議員である松田学氏と、一般社団法人  
「日本沖縄政策研究フォーラム」の仲村覚氏によるYouTube対談をもとに  
構成しています。

### 沖縄は、日本に戻れない可能性もあった

対談の中で、特に印象的だった言葉があります。

それは「沖縄は、日本に戻れない可能性もあった」という言葉です。今こそ、沖縄  
は日本の一部として当たり前のように存在しています。ですが、戦後しばらくの間、そ  
の"当たり前"は決して保証されたものではありませんでした。もし歴史の流れが少し  
違っていたら。

もし、あの時代に行動した人たちが諦めていたら。今の沖縄は、まったく違う場所にな  
っていたかもしれません。

### 沖縄返還を最初に訴えた人物 仲吉良光（なかよし・りょうこう）とは

対談で紹介されたのが、仲吉良光（なかよし・りょうこう）という人物です。おそらく、  
多くの人が初めて聞く名前だと思います。

仲村氏はこの仲吉氏を、「沖縄県祖国復帰運動の先駆者」と紹介していました。

戦争が終わった1945年。沖縄はアメリカ軍の統治下に置かれます。

家は焼かれ、家族を失い、食料も足りない。昨日までの日常は消え、明日をどう生き  
るかも分からない。人々が生き延びるだけで精一杯だった時代です。そんな中、仲吉  
氏はすでに「沖縄の未来」を考えていました。終戦直後の1945年8月。

まだ講和条約すら存在しない時期に

「沖縄を日本に戻してほしい」という陳情を始めていたのです。

「講和条約※1」も「沖縄返還」も、当時の人々には現実味のない話でした。それでも  
仲吉氏はその先を見据えていたのです。

「戦争が終われば平和会議が開かれる。その時、沖縄が日本から切り離されては  
いけない」この"先"を見ていた感覚"に、松田氏も驚きを示していました。

※1 交戦中の国同士が戦争状態を終結させ、平和を回復するために結ぶ国際条約

### 「沖縄を日本から切り離す」構想が存在していた

対談の中で何度も出てきた言葉があります。それが「信託統治」です。

難しく聞こえるかもしれませんが、簡単に言えば、「沖縄を日本から切り離し、国連管  
理の地域にする」という構想です。

これが実現すれば、沖縄は日本ではない「別の地域」として固定されてしまいます。  
一度そうなれば、もう二度と日本には戻れないかもしれない。そういう瀬戸際でし  
た。つまり、「沖縄返還」は最初から決まっていた話ではなかったのです。

当時、冷戦が始まり、中国や朝鮮半島をめぐる緊張が高まる中で、沖縄はアメリカに  
とって絶対に手放せない軍事拠点となっていきます。

アメリカからすれば、「沖縄を日本に返す必要はない」。それはある意味、当然の発  
想だったのかもしれませんが。だからこそ、仲吉氏たちは動きました。署名活動、国会議  
員への陳情、アメリカ政府への働きかけ、そして国際機関への訴え。対談では、「危  
険人物として見られていた」という話まで語られていました。それでも彼らは歩みを止  
めませんでした。

なぜ、そこまでできたのか。それは単なる政治運動ではありません。

「自分たちは日本人だ」

その思いを守るための、必死の戦いだったのです。



ホームページで参政党をチェック！  
<https://www.sanseito.jp/>

参政党とは



3つの重点政策



党員募集！



参政党チャンネル  
YouTube





# 「収容所から始めた祖国復帰運動」とは

## 英語を公用語にしなかった沖縄



写真：沖縄県公文書館所蔵

対談の中で、特に印象に残る場面があります。

仲村氏は、「アメリカ統治下に置かれた地域で、英語を公用語にしなかったのは沖縄くらいではないか」という趣旨の話をしていました。

これは、今の私たちが思っている以上に大きな意味を持つ言葉かもしれません。アメリカ統治が続けば、英語中心の社会になっていても不思議ではなかった。

実際、沖縄には米軍基地が広がり、アメリカ式の制度や文化も多く入ってきます。それでも沖縄では、日本語教育が続けられました。

学校では、日本語で学び、日本の歌を歌い、日の丸を掲げ続けた場所もあったといえます。

なぜそうできたのか。対談では、戦後の収容所で開かれた演芸会の写真が紹介されていました。そこに写っていたのは、日本舞踊を踊る少女たち。戦争に負け、家を失い、未来も見えない。それでも人々は、日本の歌を歌い、日本舞踊を踊り続けていた。

政治が動く前から、暮らしの中に「日本」が生きていたのです。

もちろん、当時の沖縄の人たちは、簡単な状況にいたわけではありません。

それでも、「日本語を捨てない」「日本人として生きたい」

という感覚を、多くの人が持ち続けていた。対談を聞いていると、それは政治的スローガンというより、「生活感覚」に近いものだったように感じます。

家族の会話。学校教育。歌。文化。祭り。

そうした日常の積み重ねの中で、人々は「自分たちは何者か」を守り続けていたのです。

## 26年後の「万歳」

1971年。

沖縄返還協定が調印されます。終戦から26年。それは、一瞬で実現した出来事ではありませんでした。東京では、復帰運動に関わってきた人々が集まり、衛星中継で調印式を見守っていたそうです。しかし、その外では激しいデモも起きていた。時代の空気は、複雑でした。そんな混乱の中で、84歳になっていた仲吉良光氏は、テレビに映し出された調印式を見ながら、両手を高く上げ、「万歳！ 万歳！」と叫んだそうです。

想像してみてください。戦争を経験し、沖縄が焼け野原になるのを見て、収容所時代を生き抜いた人々の思いを背負いながら、26年間訴え続けた人物です。

その人が、ようやく迎えた瞬間です。それは単なる「領土返還」ではありません。

「自分たちは日本人だ」と言い続けた、すべての人の26年間が報われた瞬間だったのです。その場にいた人たちの目には、涙が浮かんでいたといいます。



仲吉良光（1887～1974）は、沖縄出身のジャーナリスト・政治家。新聞記者として活躍し、「沖縄朝日新聞」の編集長や首里市長を務めました。戦後は沖縄の日本復帰運動を進め、その功績から「沖縄復帰の父」と呼ばれています。著書に『沖縄祖国復帰運動記』があります。

写真：「陳情続けて二十余年 - われら沖縄復帰期成会の歩み」より

## 今を生きる私たちは、 この歴史をどう受け止めるのか

今の沖縄が形づくられるまでに、どのような人々が、どのような思いで行動していたのか。この対談から見えてきたのは、沖縄返還の歴史が単なる「昔の政治の話」ではないということです。

そこには、「自分たちは何者なのか」「何を守ろうとしていたのか」

を問い続けた人たちの姿がありました。

しかも、その中心にいたのは、特別な英雄ではありません。

日本語を守ろうとした学校。日本文化を残した家庭。収容所で日本舞踊を踊った少女たち。そうした「普通の人たち」の積み重ねが、沖縄返還という歴史につながっていった。

今の時代、便利になり、豊かになり、世界とも簡単につながれるようになりました。それ自体は素晴らしいことです。ですがその一方で、「どんな文化を残したいのか」「次の世代に何を伝えたいのか」を考える機会は、昔より少なくなっているかもしれません。

沖縄戦のことを振り返るとき、ぜひその「戦後」にも目を向けてみてください。焼け野原から始まり、アメリカ統治の中で揺れながらも、「自分たちは何者なのか」を問い続け、行動し続けた人たちがいました。

先人たちは、何を守ろうとしていたのか。

その問いは、沖縄に生まれ育った私たちにとっても、そして次の世代にとっても、静かに受け継がれていくものではないでしょうか。



## 祖国復帰の歴史をひもとく 松田学氏

参政党代表代理。1957年京都府生まれ。1981年東京大学経済学部卒業後、大蔵省（現・財務省）に入省。経済財政政策の立案に携わり、内閣審議官、財務省課長、東京医科歯科大学教授などを歴任。2010年に財務省を退官し国政へ挑戦。衆議院議員を経て松田政策研究所代表。現在は、参政党所属の参議院議員として活動している。



松田政策研究所  
チャンネル



YouTube「松田政策研究所チャンネル」では、日本の政治・経済・歴史を分かりやすく解説しています。本記事は、当チャンネルの特番『沖縄県祖国復帰偉人シリーズ 第3回仲吉良光編「収容所から始めた祖国復帰運動」』をもとに制作しました。

◀◀ 全編はQRコードからご視聴ください。

## 地方選挙候補者公募！

2026年は沖縄県内29地域で地方選挙が行われます。  
地域の未来を担う仲間を募集しています！

詳しくはInstagram  
「参政党沖縄県連」でご検索ください！



名護市  
うるま市  
西原町  
八重瀬町  
石垣市など

今、日本人が大切にしてきた価値観や自然、助け合いの暮らしが確実に壊され、人々の心からは希望すら奪われていっています。その原因と次の世代に何を残すのかをみんなで考え、勇気を持って行動にうつす。それが、政治という未来を作る仕事です。政府や政治家だけに任せていてもはや日本はどうにもなりません。本当は誰もが分かっているはずです。他人任せをやめて、自分たちの手で日本人のための日本を取り戻そう。次世代に希望あふれる日本を繋いでいくために。

＼ 国民が政治に参加する ／



**参政党**

sanseito

◎ 参政党はHP/SNSでさまざまな情報を発信しています



参政党 事務局／〒107-0052 東京都港区赤坂 3-4-3 赤坂マカベビル 5F  
お問い合わせ・ご連絡／info@sanseito.jp